

序 □ 井上幸治

講演 □ 井出孫六・森山軍治郎・色川大吉

刊 □ 同志社大学アッセンブリ出版会

暴 徒 — 現代と秩父事件 —

序にかえて

親しい方々の講演集なので、わたくしもおつきあいするはめになった。親しいといっても、ただ顔みしりだとか、時と会ってロッキード問題を論じるというようなことではなく、その生きざまにも考え方にも同感できるという意味で、いわば同門の兄弟という関係といつてもよいものを感じているからである。

それからもうひとつ、どうしてもおつきあひしなければならなくなったのは、学生諸君がこの三人を選んだ眼力と京都まで呼び出した熱意にうたれたからである。京都からの帰りだとわずかな時間寄ってくれたが、森山さんを北海道の奥地から呼び出すということは、かなり向うみずな勇気が必要で、われわれにはできないことである。わたくしのところに来た野呂君もめずらしく折目正しい学生で、わたくしは三人をならべたことにすっかり嬉しくなり、うっかり司会者みたいな役を引き受けてしまった。そののち自分の時間とてないが、——というのはわたくしはこの春立教大学を

定年退職になるのであつてしまつて時間をとられてゐる——野呂君の催促のしかたもいかにも柔軟で、わたくしの気持ちをよくくんでくれるので、この人物を失望させるわけにはいかないと感じたので、筆をとるわけである。

三氏の講演記録を読んで、いま二つ三つの問題をあげたい。これはわたくしの念頭にたえずこびりついているものなのである。

まず第一に、三氏とも秩父事件との出会いを「自分史」のなかに位置づけていることである。

「自分史」というのはおそらく色川さんの造語で、この人は発想もきらめき、日本語のなかにその状況やことがらを新鮮な感覚でつかみ出すという歴史家にはまれなる才能をもっている。色川氏にとって昭和五十年史は自伝ではなく「自分史」であるというところに、日本社会の政治的精神的状况とともに自己の主体形成がおこなわれたことを語っている。今度、色川氏は「自分史」を展開しているわけではなく、大きな問題提起をおこなっているが、わたくしは「自分史」を下敷きにしてこれを受けとめている。

井出氏はライフ・ヒストリーからはじめてゐる。十四歳のとき、晴れた夏の日、中学校の校庭で八月十五日の重大放送を聞いた日に、軍国少年は平和少年に生まれかわつた。そのひとつの曲折はかわいい少年に凌辱感というような形で残り、これをぬぐうために歴史をさかのぼり、近代の初めに関心がうごいてきたという。ふるさと白田、そのの豪家に生まれた孫六さんのファミリー・ヒス

トリーのなかで秩父事件と出会うが、平和少年の秩父事件観はあまりさだかに受けとられていない。やがて大学を卒業し、出版社にいたころわたくしは孫六さんに会つた。それからまもなくフリーになり、例の『アトラス伝説』を書き、秩父から山中谷をへ、困民軍の足跡をたどつて十石峠からふるさとの信州路へ入つたとき、彼はこの事件で日本近代化のひとつの道が挫折し、いまは廢道になつたと考へた。わたくしはこの時期の孫六さんのブック・レビューをしたことがある。

孫六さんは大正時代の地図を探し出して、それで秩父から信州へ抜けようとし、十石峠で道を迷つたらしい。それで導標にマジックペンで、「もうすこしはつきり書いとけ」といった意味を落書きしたという話を同行者から聞いたので、わたくしがもしその落書きを見つけたら、井出孫六書と書き込み、行をかえて、「そんなことは兄貴に言え」と書き足してやるから——といったのを覚えてゐる。「兄貴に言え」というのは、今を時めくという時代めくので、今を悩みぬいているだろうというべきだが、官房長官一太郎氏は彼の長兄である。もう周知のことなのでいい訳もしないが、孫六さんはこれをいわれるとれにでれるだろう。

森山君もライフ・ヒストリーからはじめる——両親は食い詰めたあげく、美唄の炭鉱におちつた。森山君はそこで生まれ、一時期日本のフロンティアだと宣伝された北海道は、残るも地獄、入つて来ても地獄で、カボチャを食いながらそこにぞだつた。親父が菓子屋をやつて、破産すると夜逃げをし、母親も郷里の京都に帰つて兄弟四人で一時暮しを立てる。母親はまもなく帰り、ともかく彼は大学に進んだ。そこで西洋史という学問をすることになるが、どうしても西洋史の世界はま

つたく森山君の生活と別の世界、雲の上の世界で、違和感をいだきつづける。大学院に入っても、自分のやりたい歴史学はこんなものではなかったはずだ、勉強したことはいつたいなんだ、という精神状況のなかで、教授会へなだれ込んだりした。そこで秩父事件に触れ、井上伝蔵の追求が森山君の北海道民衆精神史へと駆りたててゆく——わたくしは森山君の誠実な人柄と貧困や苦悩に負けず、ひたむきになにかを追いつづける強靱な精神をこよなく愛している。彼もライフ・ヒストリーのなかで秩父事件に出会った一人で、この研究が流行っているからと、どこへでも飛び出して、ちよつとしたかんだけでものを書きまくる人間とは根本的に違っている。

第二に、ライフ・ヒストリーのなかに位置づける秩父事件、それは現在状況や現在の歴史学に多くの問題を投げつけている点をあげる必要がある。わたくしはここで民衆意識を通しての近代主義批判と共同体論をあげておくことにする。三氏の講演筆記をめぐってみれば、これが共通の問題意識となっており、しかもその共通基盤は民衆史への沈潜ということである。

あるときわたくしは「民衆史の方法」ということで講演したことがあり、これを活字にしてくれる段階で、編集者は見出しに「民衆と知識人」という総括的題名をつけているのを見て、校正の段階でクレームをつけて修正してもらったことがある。「民衆と知識人」とはおそらく大衆社会論の「大衆とエリート」の発想で、それはみずからを「民衆の子」と自覚しない客観主義のおごれる立場である。ライフ・ヒストリーのなかで秩父事件に出会ったということは、地域住民として住民運

動にも参加するし、孫六さんのように金大中事件解決のために数寄屋橋で坐り込みをおこなうことに通じるものでなくてはならず、色川さんが三里塚にコミットするのは、エリートとして農民運動の調査をするためではない。秩父事件が打ち出した思想の輝きを百年後の日本人民がどれほど越えているか。そういう色川さんのことばのなかには、おれは秩父事件にコミットするという主体性があるはずである。この態度を歴史学的方法論のなかにどうとり込むか、わたくしはいまそれを考えている最中だが、いちばん最後にあげたい問題である。

さしあたり近代主義批判。

たとえば資本主義というものは合理性の上に成立し、ヨーロッパ社会では資本主義成立の根源に禁欲的・勤労的な倫理があったということは、日本社会論をふまえた近代主義歴史学のいつにかわらぬテーゼである。その合理主義や倫理のつくり出したヨーロッパの資本主義がどれほどアジアの民衆を搾取したか、それをまた直訳して日本に植えつけようとした「理性国家」、明治政府がどれだけ民衆の生活を破壊していったか。

孫六さんは電信柱に近代化を打ちくだけという、下から待ったをかけた困民党が別の近代化の道をとろうとして壮烈に戦ったという。困民党の選んだ道は現在廃道になっている。

森山君はフランスにコンプレックスをいだいてフランスに渡る。それはヨーロッパ礼賛、モダニズムにすぎないとわかっている。皮膚感覚ではいらだたしいほどわからない。ヨーロッパでは近代的自我が形成され、日本ではない。ヨーロッパでは人間解放をとげたが、日本ではそれがなかつ

た。それは日本では共同体があつたからだ。そう近代主義の装いをこらした理論は説きつづける。しかし森山君はフランスでは日本ほど個人は孤立していないし、共同体関係が残っているし、共同地も多少はあるし、お祭りもたくさんあるし、市も立って露店がならぶ。人と人とのつながり、人間関係のなごやかさ、かえつてそこに美根炭鋺の人びとの生活と同質のものがある。森山君はヨーロッパの価値感をそのままのみにすることの危険性を強調する。

つぎに森山君にあらわれるように近代主義批判は、共同体論に重大な焦点を置いている。

共同体のなかに、起ち百姓、寝百姓とがあるというのは森山君。これをいつそう民衆思想史の方法でつめてゆくのが色川さん。起ち百姓を通俗道徳が断罪し、「内縛の論理」をつくる。民衆のなかにいて民衆を逆に秩序づけようとした連中が、秩父蜂起の革命思想を葬ってしまう。こういう思想の闘いは共同体でずつとおこなわれてゆく。生活共同体のなかに人間の生存権の主張があり、地縁、血縁に結ばれて何百年も闘い抜いて来た。小さな、一軒でも欠けると集落の農業経営も成立しなくなるような運命共同体、これがなんで「前近代」なのか。生存権をまもるのが国家・政府の仕事であるならば、これに抵触するものは打倒してよい。そのなかで個は共同体と分離できないし、これをまもるために闘うことは正義である。それは別に理論で教えられたことではなく、生活レベルで確認された思想である。通俗道徳は単に共同体の内的規律ではなく、対立者を打倒する外的志向性をもつ思想に転化する。秩父困民党がそれである。

わたくしは色川氏の講演原稿を読んでいて次のような話を想起した。

ヨーロッパの植民主義者が植民地住民が昼間から木陰に寝そべり、怠けられるだけ怠けている実情を非難するとき、いや待った、余剰労働をそっくり搾取されるのだしたら、食料だけ確保してあとは寝て暮すのがいちばん合理的な生活様式ではないか——これはパラドックスでもアイロニーでもなく、怠惰はここでもっとも合理的な通俗道徳である。もし積極的に解釈すれば、それは植民地搾取に対するサボタージュ戦術であるわけである。

民衆底辺の幻想——民間信仰、阿弥陀信仰、天皇信仰を非合理的の一言ではねつけても、民衆の意識のなかで生活に追い詰められれば、超越的な存在にすがりつく。なにが、誰がそこに追い込んだのか。植民地住民の場合と同じ問いかけができる。民衆思想の近代性からの批判とか、封建制のレッテル張りとか、それで解決できない思想現実の問題、物質力に化してゆく問題がそこにある。

最後に、第三の問題として方法論にふれてゆきたい。

わたくしはかつてある会で、かなり酔っていた若い友人から「お前は秩父暴動を事件として客観化してしまった。お前にとつて秩父事件とはなにか」とからまれたことがある。わたくしは「その問題だったら、しらふのとき願いたい」と相手にならなかった。しかし、これに答えるにはかなりことばをついやさなければならぬだろう。それは歴史の客観性にふれる問題だからである。今度の三人の講演のなかで、森山君が色川氏の『ある昭和史』にふれて、自分の歴史のなかにひとつの普遍的な歴史というものを、自分という具体的な生きている自分のなかからつかみ出さな

れば意味はないのだ、という意味のことを述べている。この通りだと思ふ。しかし問題はこれだけだろうか。

民衆史、民衆思想史にしても、もう理論構成を考えなければならぬ段階に来ており、多少その試みもおこなわれている。わたくしはこの問題について最近二、三回講演したことがあり、近いうち活字になると思うので方法の問題については今度は省略し、三氏の講演について感じた点を指摘しておきたいと思ふ。

(一) 「お前にとつて秩父事件とはなにか」とわたくしに食つてかかった友人は、平素の言動からわかるが、主情的というか、情緒的というか、ひとりの観念論者で、彼にとつて歴史は意識の内容にすぎない。歴史事実というものが単に意識内容だったら、誰かがいつている歴史フィクション論にもつながるだろうし、叙述はすべて歴史文学でよいだろうし、われわれは床の中でうとうとと想を練つていればよいということになる。べつに初歩的なことをここで申しあげるつもりはないが、わたくしの現在の(研究)主体にとつて、秩父事件はなにかであり、わたくしのふるさとの爺さまたち——井上伝蔵はさかのぼるとわたくしの井上一族である——が、共同体の緊縛の論理を竹槍で突き破つたことに感動してわたくしは研究を始めたわけである。このときわたくしは自分の感動なり、爺さまたちのいだいた怨念に対する共感なり、そういう意識内容を分析しようとしたのではない。それは純粹に文学者の仕事である。その意識内容はわたくしの主体性で、それがこの問題を選んだということになる。それからのちは完全に歴史家の仕事で、どれだけ史料を探し、脚

で歩いたか、二、三十年かかった。その間、社会科学の方法も学んだし、歴史学の約束ごともちちおう身につけた。ふるさとの爺さまたちのいだいた怨念は歴史的事実であり、これを大状況から具体的に記述することが歴史家の仕事である。この区別がわからないと、歴史学と歴史文学は同じものになってしまう。

(二) 初めに述べておいたように、ライフ・ヒストリーは自伝であり、自分史であり、そのなかで秩父事件と出会つたというのは、研究主体が秩父事件を主題化する過程を述べることである。それは歴史学でいうと「選択」という問題になる。くどいようだが自分がこれを選ぶということは主体性——社会科学者はこのことばを避けるが、それは経験的論理的に構成された価値観、歴史観、世界観いっさいを含んでいる——のいとなみである。現在の社会に憤りをいだき、しかもその社会に民衆のひとりとしてぶつぶつ鬱積したものを吐きつけながら生きている現在の主体が、秩父事件を語ろうとする。森山君は自分のなかのものを「普遍化」するとうとき、それはことばでそれを語ろうとすることである。E・H・カーのいう通り、歴史家はことばを使うことによつて歴史家は普遍化をまぬがれないという。しかしライフ・ヒストリーは出会いの場の意識を普遍化しようということ、主体性の形成、選択の問題にどうしても重点が置かれてくる。

(三) ことばは普遍的であるとともに客観的なものである。だからわたくしの話すことを他の人も理解するわけであるが、そのことばをここでは類型的概念と置き換えてよい。それは歴史学用語として明確化される。つまり歴史的認識は類型的、概念的認識であり、単なる直観的認識ではない——

話がそれてきて、どうしても説明不足になつてしまふが、わたくしのいいたいことは、これから民衆史は概念構成を明確化し、歴史的認識方法を確立し、一応理論体系を組み立て、研究を始める人びとが理論的にもアプローチできるようにしたいという点である。色川氏にはいつもその必要を話しているが、自分では気が向かないらしい。しかし今度の講演記録をみると、自分史でなく、民衆史の道具となる言葉（概念）が正確に豊富にあり、わたくしは概念構成のデータをここから拾い出したいと思つてゐる。

立教大学教授

井上幸治

はしき

近年における民衆史研究の質的深化は、歴史認識そのものの再構成と歴史変革主体の再確認という問題をすべく提起しているように思われる。

とりわけ、暗澹たる歴史空間の奈落——それはあまりにも鮮やかな印象と事象の間にある無限的な深い漆黒の闇の空間——に点存する人間存在の確知を執拗なまでに私たちに迫つてゐる。

深奥たる闇と闇を這い回る彼方からのヘソの緒の遠くなるような長さにうんざりする——それが現実を見てしまった時、新たな次元が私の天空をかすめ飛ぶ。しかし絶えず不安定に。が、それがさえそのような気がするだけかもしれない。けれども、そのヘソの緒にがんじがらめに縛りつけられ、異様なまでにくびれ切つた空間を、私たちはどのような顔をして見たらよいのであろうか……。は本書で展開される秩父事件も、そのようなところで大きな意味を持ち得るものと考ええる。

作家としての井出孫六氏、フランス史研究者の森山軍治郎氏、日本近代史の専門家である色川大

吉氏、それぞれに担うべき世界は違おうとも、共に同時間を共有した者として、当然避けて通ることのできぬ「業」を背負ってしまったのかも知れない。

今ここに秩父事件を通し、未確知なるかすかな息遣いを彼方遠くに聞き取ろうとしている。ぎこちなく両の手から伝わるかすかな息遣いは、時として己の心臓の鼓動の高鳴りにかき消されながらも、確かに重複し合う二つの違音はいっしかうなりとなって体を突き抜け、一瞬体を強張らせる。ひよつとして、虚構なる一点の世界が、したたかな論理性をもつて内実へと転化するのはこの一瞬にあるのかも知れない。

陋浅なる私感はともかく、三氏が語る秩父事件が現代と表裏一体の、現実の自分史との緊密な連続性あるものとして措定されていることは、ここでくどくどというまでもなく本論を読まれば御判りいただけよう。

さらに本書巻頭には、秩父事件研究の第一人者であられる井上幸治先生に本論の総体的な評説を「序文」として寄せていただき、併せて先生自身の秩父事件の世界をも論述していただいた。

本書に収められた講演録は、一九七五年十月二十八、二十九、三十日の三日間、「氾濫と夢想——地下水——その根底に流れるもの——」と題して行われた同志社大学労学アッセンブリー・アワーの集大成である。

すべてが初めてづくしの出版作業であるにもかかわらず、なんとか体裁を整えて出版することが

できたのも、多くの方々の御協力の賜物と深く感謝しております。

なお、忙中にもかかわらず「序文」を快く引き受けてくださった井上幸治先生には新ためて深く謝意を表すると共に、本書の出版を具体的に進めていただいた楠本耕之氏にも紙上を借りてお礼を申します。

最後に、本書に関しての責任は勿論のこと、講演から出版に経る過程そのものの責任もすべて同大アッセンブリ出版会にあることはいまでもないことであります。

本書が、読者の思惟空間に一石を投じるものとなれば幸いです。

一九七六年三月十三日

同志社大学アッセンブリ出版会

代表 野呂健一